

# 礼拝奏楽における一考察

A Study of Playing Church Music

高 田 正 久 \*

## 要 約

キリスト教の礼拝では、礼拝の流れを担う大切な役目を音楽が果たしており、その中で多くは、楽器を用いた礼拝が行われている。礼拝の開始を告げる「前奏」、会衆が歌う讃美歌の伴奏、聖餐式や献金の際の音楽も楽器によって奏され、礼拝が進められる。楽器の種類は鍵盤楽器が主で、オルガンやピアノなどが使用されるが、その演奏法や表現は各々、場面に応じたものでなければならない。

奏楽者は演奏のみならず、前奏曲などの選曲も任されているため、礼拝の内容についても十分に周知しておく必要がある。奏楽するために必要な礼拝内容の認識や礼拝音楽の知識、楽曲の分析、演奏法、楽器の特徴など、予め考慮すべきことや習得しておくべき知識や技能などについて考察し、述べた。

キーワード：キリスト教音楽、礼拝奏楽、鍵盤楽器、演奏法

## I. はじめに

一般的に「音楽」を表現する手段としては、まず音楽として構成された「曲」があり、大別するならば音を出す手段としては「声」を使ったもの、「楽器」によって表現するものなどに分けられる。表現形態としては1人で奏する独唱や独奏、少人数でのアンサンブル、大人数での合唱や合奏などがあり、その演奏スタイルは様々である。

本稿で述べる「礼拝奏楽」は、基本的には鍵盤楽器（オルガンやピアノなど）を使い、讃美歌の伴奏や前奏曲・後奏曲などの演奏を行うものについてである。それはキリスト教の礼拝における流れを形づくる大切な要素にもなっている。

礼拝の中での「奏楽」の場合、演奏される曲そのものだけを表現することが目的ではなく、礼拝全体の内容を表現するものとして、その一旦を担っているのである。奏楽をするためには、まず礼拝やキリスト教音楽についての理解と知識が必要となる。また奏楽についての見識と確かな演奏技術、曲の洞察や分析する上での音楽理論などの知識、奏楽楽器についての知識なども必要不可欠である。

奏楽は、会衆が歌う際の伴奏を行うのみならず、

礼拝開始の「前奏」、聖餐式や献金の際の「間奏」、最後の「後奏」など礼拝の中において様々な場面に応じた奏楽内容が必要である。具体的にどのような知識や技術、習得しておくべき事柄が必要なのかを明らかにしてみたい。

## II. 奏楽の前に—キリスト教音楽と賛美歌について—

まず、はじめにキリスト教音楽の歴史についても知識として身につけておく事も大切であるため、簡単に触れておくことにする。

古代から人々の生活の中に音楽は欠かせないものとして存在し、中でも宗教とは深く結びついており、その信仰への想いが音楽に込められてきた。そして音楽は信仰への想いを表現するものとして、また他者へ伝える道具として用いられてきた。「キリスト教音楽の定義」として、礼拝は心をひとつにして共に祈り、共に賛美をささげる信仰の共同体であり、信仰の共同体としての祈りや歌となっていく。

また礼拝で歌われる「讃美歌とは何か」という定義について、聖アウグスティヌス（353年－430年）によると『①讃美歌とは歌うことによる神への賛美である。②讃美歌は神への賛美を表現する歌であ

\* Mashisa TAKATA 聖和短期大学 教授 音楽Ⅰ・Ⅱ

り、賛美であっても、神への賛美でなければ讃美歌ではない。③さらに歌われることが必要である。』の3つの事柄である<sup>1)</sup>。

その「歴史」として賛美歌の古い例ではアレクサンドリアのクレメンス（150年～215年）の書いた賛美歌は歌詞が創作賛美歌として最古の例である。（讃美歌21-359番）<sup>2)</sup> またアレクサンドリア学派に属する3世紀末のものと思われるもので1918年エジプトのオクシリノコスで発見されたパピルス断片によって当時のキリスト教会の賛美歌音楽が知られるようになった。キリスト教の讃美歌の歴史を遡るとユダヤ教の賛美歌に到達する<sup>3)</sup>。ユダヤ教の聖典の旧約聖書の中には色々な形の賛美歌が入っており礼拝音楽の演奏法や聖歌隊の編成に関する多くの記述がある<sup>4)</sup>。

旧約聖書で音楽に関する記載が最初に出てくるのは創世記4章21節の「その弟はユバルといい、堅琴や笛を奏でるすべての先祖となった」である<sup>5)</sup>。また出エジプト記15章1節には「モーセとイスラエルの民は主を賛美してこの歌を歌った」<sup>6)</sup>、詩編150編3-5節では「角笛を吹いて～神を賛美せよ」<sup>7)</sup>などが出ており、新約聖書ではマタイによる福音書26章30節に「一同は賛美の歌を歌ってからオリーブ山へ出かけた」<sup>8)</sup>などの記載がある。

このように、歌や楽器をもって礼拝をする伝統は聖書の時代からキリスト教会にあった。そして初代教会から様々な楽器や手拍子、踊りなどを用いて民衆的な賛美が礼拝に持ち込まれることが慣例化していった。そのため礼拝での公同性を保持するため、367年ラオデギヤの宗教会議で礼拝での楽器の使用と会衆が歌に参加することを禁止し、宗教改革までは聖歌隊がその役割を担っていた事もあった<sup>9)</sup>。

その後、単旋律聖歌のひとつである「グレゴリオ聖歌（グレゴリアン・チャント）」が作り上げられ、

ローマ教会の公認の聖歌となった。そのグレゴリアン・チャントの成立は、8世紀から9世紀と考えられ、ローマ・カトリック教会の単旋律聖歌の時代を築いた<sup>10)</sup>。中世期後半からは単旋律から多声部音楽へと発展し、ドイツのマルティン・ルターが宗教改革を行い、教会の改革と共に独自の教会音楽を生み出した。その後、ヨハン・セバスティアン・バッハが生まれバロック様式の時代となり、言葉を伴った作品では合唱にオーケストラを伴った大規模な作品等も出てきた<sup>11)</sup>。また器楽曲の中でもオルガン曲では讃美歌のメロディーをモチーフとしたコラール前奏曲は重要で礼拝のための音楽として大切である。様々な作曲家がコラール前奏曲を作ったが特にヨハン・セバスティアン・バッハは歌詞の内容にまで深く入り、それを表現しようと試みた<sup>12)</sup>。

「日本の賛美歌」については1874年に各教派それぞれの歌集として、賛美歌が出版され、その後、各派共通の讃美歌を出版、1931年には改訂版が出された。そして、戦後になり由木 康らが中心となり日本基督教団讃美歌委員会による『讃美歌』（1954年版）が出版され、1997年には同委員会より現在の「讃美21」が出版された<sup>13)</sup>。

### Ⅲ. 礼拝音楽について

#### 1. 使用楽器とその種類について

楽器には様々な種類があり、一般的には鍵盤楽器（ピアノ・オルガンなど）、弦楽器（ヴァイオリン・ギターなど）、吹奏楽器（フルート・リコーダーなど）、打楽器（太鼓・木琴など）などがある。礼拝にはピアノが使われる事もあるが、主にオルガン（リードオルガン、電子オルガン、パイプオルガン）が多く使われている。以下、オルガンの種類について、簡単に特徴を示す。

- 1) 原恵 横坂康彦 2004 新版 賛美歌 ―その歴史と背景 日本キリスト教団出版局 pp. 13-14
- 2) 日本基督教団賛美歌委員会編集 1997 讃美歌21 日本基督教団出版局 p. 589
- 3) 原恵 横坂康彦 2004 新版 賛美歌 ―その歴史と背景 日本キリスト教団出版局 pp. 26-27
- 4) 原恵 横坂康彦 2004 新版 賛美歌 ―その歴史と背景 日本キリスト教団出版局 p. 17
- 5) 共同訳聖書実行委員会編集 1987・1988 聖書 ―新共同訳― 日本聖書協会 旧約 p. 6
- 6) 共同訳聖書実行委員会編集 1987・1988 聖書 ―新共同訳― 日本聖書協会 旧約 p. 117
- 7) 共同訳聖書実行委員会編集 1987・1988 聖書 ―新共同訳― 日本聖書協会 旧約 p. 989
- 8) 共同訳聖書実行委員会編集 1987・1988 聖書 ―新共同訳― 日本聖書協会 新約 p. 53
- 9) 原恵 横坂康彦 2004 新版 賛美歌 ―その歴史と背景 日本キリスト教団出版局 p. 28
- 10) 原恵 横坂康彦 2004 新版 賛美歌 ―その歴史と背景 日本キリスト教団出版局 p. 42
- 11) 横坂康彦 1993 教会音楽史と賛美歌学 日本基督教団出版局 pp. 39-40
- 12) 横坂康彦 1993 教会音楽史と賛美歌学 日本基督教団出版局 p. 42
- 13) 日本基督教団出版局編集 1997 礼拝と音楽 第93号 日本基督教団出版局 p. 5

### (1) リードオルガン

空気を送るための足踏み装置が付いている。足で「踏み板」を交互に踏む事により空気の流れ（風の流れ）を起こし、それによってリード（金属板）が振動し音が鳴る。音量は主に「踏み板」を踏む速さにより変わる。「ストップ」が付いているものもあり、その場合、音色や音量に変化をつける事が出来る。

### (2) 電子オルガン

電気式で鍵盤がスイッチになっており、押すとスイッチが入り、スピーカーから音が出る仕組みで、音量はヴォリューム操作装置による事が多い。音色の変化は様々な種類の音が出せるスイッチが備えられている。

### (3) パイプオルガン

リードオルガン同様、空気の流れ（風の流れ）によって音を出す楽器。基本的にはリコーダーなどの吹奏楽器と同じである。特徴の一つは「ストップ」が付いており、ストップを入れることにより音色が変わる事やストップの数を増やしていく事によりパイプの本数が加わり音量も大きくなる。また手鍵盤以外に足鍵盤があり、主に低音域として使われる。

現在のパイプオルガンはモーターによる電気式の送風機で風を起こしているが、電気式送風装置が出来る以前は「ふいご装置」を「ふいご操作係」が足で踏むなどの動作により、風を送っていた。

以上、奏楽にあたっては各々、楽器の構造や音色の違いなどの特徴をよく把握したうえで曲の表現や演奏法を考えることが重要となる。

## 2. 奏楽者としての留意点

### (1) 礼拝への事前心得

まず礼拝に向かう奏楽者の姿勢が大切である。それは奏楽が礼拝の流れを形づくる大切な役目を担っているからである。

#### ①礼拝内容を確認し、考慮する。

教会暦、説教題、聖書、祝祭・行事などから、どのような礼拝であるかを理解する。

#### ②礼拝の流れと、奏楽が入る箇所を式次第で確認する。

前奏、献金、後奏などは礼拝の流れをつくるものとなるため、特に弾き始めのタイミングが重要である。

#### ③礼拝場所と設備などを確認する。

礼拝をする場所、広さや音響効果、会衆の大体の人数や年齢層、奏楽に使用する楽器の種類などを確かめる。

#### ④司会者、説教者と事前に必ず礼拝内容・流れの打ち合わせを行っておく。

#### ⑤特に讃美歌の奏楽は会衆をリードし、共に賛美をする重要な役割であり、自身も歌いながら弾ける位の十分な弾き込み、練習が必要となる。会衆と共に賛美しつつ、奏楽する気持ちを持つこと。

スムーズな奏楽は会衆の歌い易さにもつながる事となり、それはより良い賛美へと結び付いていくことにもなるため、まず、自身が十分な準備を行い、気持ちにゆとりを持って礼拝に臨むこと。そのことが安定感のある礼拝の流れをつくり出す大切な要素となるのではないだろうか。そしてオルガニストの存在が無くなるくらい、会衆とオルガニストの奏楽が一体化することが望ましい。

### (2) 前奏・献金・後奏曲等の選曲について

#### ①前奏曲：礼拝内容に沿った曲を選ぶ。具体的には、説教／聖書／讃美歌などとの関連性をよく考えて選ぶ。基本的にテンポはあまり速すぎず、長すぎない曲（3～5分程度）が望ましい。

#### ②献金曲：静かに落ち着いた曲が望ましい。状況に応じて区切りを付け、終止へともっていけるように予め、考えておくこと。音量は控えめにする。

#### ③後奏曲：祈祷後などの後奏は短い曲で、比較的テンポがゆっくりで細かい音の動きの少ない曲が望ましい。後奏曲は礼拝の締めくくりとなるため、スムーズに入れるようにタイミングを図り、礼拝内容にもよるが、基本的にはあまり音量が大きすぎない方がよい。

### (3) 讃美歌奏楽の音楽的・技術的な留意点

#### ①事前の準備

##### ・讃美歌の歌詞内容を吟味する。

どんな曲で何を表現しようとしているかを考えてみる。特に子どもたちと「こどもさんびか」を歌う場合はイメージ作りのために歌の内容、様子などを分かりやすく、事前に伝えてお

く事も大切である。

・読譜について

楽譜の読み方として、まずメロディーの流れを見る。特に多声部の場合には合唱の各パートと同じように、各声部の横の流れを見る。また和音の動きについては縦方向にも見る。次に楽譜全体の音符の動きをグラフのように見て曲の山、谷などの流れを掴む。そしてテンポ・拍子・調性・リズム等の特徴を捉え、どのような曲なのかを熟考することが、その曲の表現内容につながるものと考ええる。

・「歌」を意識する

息継ぎの場所、旋律のフレーズ、歌詞のまとまり等を確認し、何よりもまず、自分で歌ってみることである。出来れば、その曲を覚えてしまうことが望ましい。

・楽譜への書き込みについて

指使いの番号は、レガートで弾く事やスムーズな指の運びをするため書き込み、左右の指の受け継ぎ箇所も予め考えたうえで、マークを付けておく事も一つの方法であろう。

②伴奏法の実践について

・リードしていく要素もあるので途中で間違えても弾き進むこと。

歌っている人が不安にならない様に弾き進めていく。その際には、メロディーのラインだけは確実に保って弾く事を心がける。

・会衆の歌声をよく聞きながらリードし、全体の流れも掴みながら弾く。

奏楽と歌を一体としてとらえる事。その時に大切な点は、①自分が弾いている流れ、②会衆の歌の流れ、③全体の流れ、の3点についてどのような様子なのかを注意して聴きながら弾く。自分も心の中で歌い、会衆と共に呼吸する事。そのためには息継ぎの場所、フレーズ感、歌詞の言葉のまとまりなどを意識する。

・テンポについて

特に人数が多い場合には讃美歌を歌うテンポが遅くなることが多いため、会衆と合わせながらも、奏楽がいかに関与していかけるかが課題で、冷静に全体を聴きながら、弾くことが重要となる。

・音量の調整

会衆の人数が多い場合、また会場が広い場合などは少し音量を大きくするなど、その場所に合った調整が必要である。

・曲の始まりについて

曲の始まりは、強拍や弱拍からのものがあり、それによりメロディーやフレーズのまとまり、アクセントの位置が変わってくるため、確認する。

・音符の長さは、基本的にテンポや拍子、リズム、曲の流れによって違ってくるが、特に何音符を1拍の基準とした拍子の曲なのかなど、拍子を確認する。

・「アーメン」の弾き方

アーメンをつける場合は基本的にその曲と同じテンポで弾く事が望ましい。但し終わりの部分なので、少し遅めになっても良いが、極端に遅くはならないようにしたい。「アーメン」が付いていない讃美歌、または「アーメン」を付けない場合などは、最終節の終わりの部分は、少し、リタルダンド（次第にゆっくり）をする与会衆にとって、最後が分かりやすい。

・「器乐的」に弾かないように心がける。

歌の伴奏として大切なことは、楽器で奏する場合のような「器乐的」な弾き方をしない事である。第一に歌の曲としての流れや表現を考えること。この点は、伴奏法のまとめとして以下にあげておく。

例えば、符点8分音符と16分音符が、組み合わせられたリズムの場合、曲のテンポにもよるが、16分音符の長さが短くなり過ぎないようにし、その音符と歌詞が一致している時には歌詞の流れが「言葉」として自然な流れになるようなニュアンスで弾く事が望ましい。

「器乐的」に弾かないこと具体例としては、讃美歌21第507番「主に従うことは」<sup>14)</sup>のメロディー部分の各小節1・2拍目後拍の16分音符のリズムなどがあげられる。

③留意事項の具体例

まとめとして上記、讃美歌21第507番「主に従うことは」を例に、讃美歌の伴奏にあたっての具体的な留意事項をあげる。

・歌詞を読み、内容を確認する。

・曲がどのような背景で出来たのか作詞、作曲者

14) 日本教団基督賛美歌委員会編集 1997 讃美歌21 日本基督教団出版局 pp.830-831



について調べる。

- ・調性（長調－短調など）の確認。
- ・拍子を確認し、特徴を掴む。但し、拍子の書かれてない場合もあるが、その場合は旋律のまとまりや音の高低で特徴を掴む。
- ・メロディーラインについて

流れやリズムの様子など全体を見てその曲の特徴を掴む。（なめらかなのか、軽快か、力強いのかなど。）また、グラフのように見て、音の高低による変化を確かめ特徴を考える。その際にはフレーズのまとまりや息継ぎについても確認する。この曲は符点8分音符と16分音符の組み合わせのリズムが多く出てくるのが特徴だが、16分音符が「鋭く」なりすぎないように、歌詞の流れと合うリズムで弾くことが大切であろう。

- ・テンポの設定について

曲の最後の小節の下にメトロノーム記号が記載してあるので、参考にする。但し、これは一つの「目安」としての表示であるので、絶対的なテンポとして考えない方が良い。曲の様子はテンポによって決まるため、テンポ設定はとても重要である。特に歌の曲の場合、歌いやすいかどうかテンポによるため、まず、自分が歌ってみて、決めることも大切な点である。

- ・アーメンを付ける場合について

基本的に曲と同じテンポで弾くことが望ましいが、終わりの部分でもあるため、少し遅くしてもよいと思われる。但し、遅すぎない様に気を付ける。

- ・引用聖句として、内容に関連する聖書箇所があげられているので予め読んでおく。
- ・生き生きと安定感を持って弾く

曲が前へと進み流れるように、また、リズムが重くならないように心がけ、スムーズな演奏となるように練習を十分積んでおく。

#### IV. オルガン奏法とピアノ奏法の違い

両方とも鍵盤楽器ではあるが、音の出る仕組みが違うため構造も違い、オルガンとピアノでは異なる楽器でもある事を考慮し、演奏する必要がある。

ピアノは鍵盤を押すと中のハンマーが弦を打って音が出て、次第にその音は減衰するが、リードオルガン・パイプオルガンなどは鍵盤を押している間、

空気が送られ音が出ている状態が続き、また電子オルガンも同様に鍵盤を押している間は音が出続けることとなる。

以上のように構造の違いからくる音の出方の違いを十分に考慮した上で、演奏することが重要である。

#### 1. オルガンの場合

- (1) 前奏曲の場合、曲の形としては対位法的な曲が多く、右手で低い声部の音を弾く場合や、またその反対のパターン、左手で高い声部の音を弾く場合もあり、左右の指の使い方を音符の動きに合わせて柔軟に持ち替えることも必要で、和音においても音程の巾が広い場合も同様である。
- (2) 指でつなぐ、レガート奏法＝指の持ち替え（音を弾いている間に指かえを行う）が多く必要となる。また親指などをすべらせるグリッサンド奏法などもある。
- (3) 讃美歌を弾く際には特に讃美歌奏法を身に付けておく必要がある。それは和音などをレガートで奏するための指番号の工夫や指の運び方、また和音が続く際には、楽譜通りに奏するのではなく基本的にアルト、テノール、バスの声部が同音で続く場合には、同音をタイで結び、響きを保持させることなどである。但し、リズムカルな曲の場合などは曲の内容により同音をタイで結ばない方がよいケースもあるため、予め曲の特徴をよく把握しておく必要がある。

#### 2. ピアノの場合

- (1) ペダルの使い方

ピアノにはピアノ特有の装置として基本的には2本のペダルが付いている（現在では様々な目的から3本ペダル付もある。）。そのペダルの使い方は右側のペダルは音を豊かに響かせたり、なめらかに繋いだり、延ばす場合に使われ、また左側のペダルは音色をを柔らかくする事や弱音にするために使われる。特に右側のペダルの使い方は曲に応じた踏み方が大切で作曲家の時代や曲の特徴、内容によって踏み分ける事が必要である。場合によっては踏み過ぎると音が混ざり響きが汚く

なり、メロディーが分からなくなってしまう事があるため、耳でよく聞きながら注意深く踏むことが必要であり、踏まない方がよい場合もある。

また同じ和音が続く場合は基本的には踏み続けてもよく、和音が変わる場合には踏みかえる。また音階の出てくる場所については、特にペダルの指示がある場合は別として、踏むことにより、音が混ざり響きが濁るため、音階の部分の長さに関わらず基本的には踏まない方がよい。

- (2) 讃美歌をピアノで弾く場合は左の手の和音（へ音記号のパート）は楽譜通りにあまり切り過ぎずに出来るだけレガートで、また場合によってはオクターブ下げると低い音域が加わり、全体が豊かな響きとなる。
- (3) 前奏曲で「コラル前奏曲」や「コラル風」の曲を弾く時にも、前掲の讃美歌を弾く場合のように、左手の低い音を豊かに響かせる事も大切で、和音が続く場合などはベース音に1オクターヴ低い音を加え、響きを豊かにすることも一つの方法である。但し、強すぎないようにする。

## V. 《音を出すときの留意点》

自身が弾いている曲を出来るだけ冷静に、客観的に聴くようにして演奏する。

楽譜に書かれている各々の音符の流れには意味があり、弾く側はその「意味」をいかに読み取り、いかに音にしてその曲の内容を表現できるか、が重要である。

1. どのような目的で、どのような曲をどのように弾くかを考慮する。  
各々の曲には軽快、重い、華やか、力強い、なめらかなど様々な特徴があるので、それを把握する。
2. 音楽は音による表現であるので、音色や強弱も含めたニュアンス（表情）が大切である。ただ、楽譜の音符を追うだけや単に音を出し、追っていくだけでは表現の豊かな音楽にはならない。
3. 曲や音楽の質感が大切となる。（響き、流れ、リズム感など。）  
(1) 音楽の3要素としてメロディー、リズム、ハーモニーがあり、その曲の特徴を3要素

から掴み、表現を考える事。

- (2) 曲の様子は音の出し方でも決まるため、まずその曲のイメージを持つこと。また和音の響かせ方なども重要である。
4. 曲の始まり方や終わり方についても考慮する必要がある。  
どのように始まり、どのように終わるのか、テンポや音量、音色などについて考えておく。特に前奏・後奏などは音を出すタイミングと音のニュアンスを考えて弾く事が重要である。

## VI. 習得しておきたい事項

ただ、単に楽譜の通りに弾くのみではなく、様々な場面や状況に応じた演奏及び表現が出来ることも奏楽者として必要な点である。そのための予め習得しておきたい要素を以下にあげた。

1. 和音の知識と使い方を知っておく。  
・伴奏形の変奏や省略などにも応用でき、また曲の構造を理解する助けとなる。
2. 初見力を身につける  
・楽譜を多く読むことにより、音の動きや流れなどのパターンを知ることになる。
3. 間違えてもメロディーの流れや和音の骨格となる音符を見ながら、弾き通すことのできる対応力の必要性。
4. 運指法を知っておく。  
・各々の指の動きの特徴や使い方の知識を身に付けておくことで、演奏がスムーズとなる。
5. 曲のレパートリーを多く持っておくことで、選曲するうえでの選択肢が広がる。
6. 移調の知識と実践力をつけておく。  
・音の高さの移し替えなどが可能となり、時によっては会衆が歌いやすい音域で歌える事にもなる。

## VII. おわりに

キリスト教の礼拝ではその多くは、音楽が様々な形で用いられており、礼拝の流れを司る大切な役割を担っている。

本稿では「奏楽者」が、「司会者」や「メッセージを語る者」と共に礼拝の流れ全体を把握しリードする重要な立場であることを踏まえ、奏楽するにあたって、礼拝及び礼拝音楽についての必要な知識や心構え、また音楽的な事柄や技術面などについての

考察を行った。

古代より信仰の対象としての神に向かうとき、その思いを心の内に留めておくことのみならず、具体的な表現方法の一つとして「音楽」が用いられてきた。また、その思いを共有する、共同体としての表現方法も同様であった。

それは歌であったり、楽器を使つての祈りや賛美を表わすものとして次第に定着した。旧約聖書の中にもあるように、その時代からキリスト教会に音楽があったことは古代から現在に至るまで、賛美には音楽が大切な要素として礼拝の中に位置付けられてきたことがわかる。歴史の流れの中で礼拝音楽の形態が時代背景や宗派などの違いや考え方により、一切、楽器を使わず、聖歌隊のみの賛美形式をとる礼拝や、逆に様々な楽器を取り入れ大規模な形をとる礼拝形式など様々な形態が生まれてきた。今日、一般的には鍵盤楽器であるオルガンやピアノが奏楽楽器として、使われ、礼拝ではその流れをリードするものとして、やはりオルガンが主に使われている。

奏楽する場合には、礼拝で独奏（前奏・後奏）、伴奏（会衆賛美）、間奏（献金・聖餐式）などの様々な場面ごとの弾き分けが必要であり、奏楽者は教会暦に基づいた礼拝・祝祭・行事などの内容やその意味をしっかりと把握し、それらに沿った表現や技術が求められる。また前奏・後奏曲などの選曲についても熟考されたものでなければならない。そのためにはキリスト教の礼拝、キリスト教音楽、賛美歌などについての知識と理解、曲の形式や構造及び楽曲分析のための音楽理論の知識、使用楽器の特性を理解した上での演奏法が必要で、特にオルガンの場合ストップ付き（音色や音量調節機能）オルガンでは、場面に応じた音色、つまり礼拝内容や流れに応じた、相応しいストップの選び方がとても重要となる。それは礼拝の雰囲気全体にかかわるものとなるのである。そして何よりも会衆賛美の伴奏法を正しく身に付けることはスムーズな礼拝の流れや会衆賛美につながり、共同体としての礼拝で、一体感のある礼拝になるかどうかの大切な要素となる。また初見で楽譜を見て演奏する力も必要であり、それは急な奏楽の必要性が出来た場合の助けや様々なパターンの楽譜をすばやく読む練習ともなるであろう。最後に、前奏曲や賛美歌など、普段から豊富なレパートリーを持っておく事も大切で、その事は状況に応じた選曲の選択肢の幅が広がる事や曲を準備するう

えでの技術的な備えにもなり、それは安定感のある演奏に結び付くことに他ならない。

奏楽者は、それらを総合的に身に付ける事により、礼拝を豊かに表現するための良き奏楽が可能になると考えるものである。

## <付記>

本稿は聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター第19回研究会で、発表の「礼拝における良き奏楽とは」―保育の場や教会での奏楽者のために―を上記、研究センターの第5回公開講座講演録としてまとめた小冊子中の「付：礼拝奏楽の手引き」に加筆・修正を行ったものである。

## 引用・参考文献

- 原恵 横坂康彦 2004 新版 賛美歌 ―その歴史と背景― 日本キリスト教団出版局  
共同訳聖書実行委員会編集 1987・1988 聖書 ―新共同訳― 日本聖書協会  
横坂康彦 1993 教会音楽史と賛美歌学 日本基督教団出版局  
日本基督教団賛美歌委員会編集 1997 讃美歌21 日本基督教団出版局  
日本基督教団出版局編集 1997 礼拝と音楽 第93号 日本基督教団出版局